天椅子

飛鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天椅子

【Ｎコード】
Ｎ０９７７Ｆ

【作者名】
飛鳥

【あらすじ】
「俺は死んだんだ。」一人の青年が天に召されたが何故死んだのかわからない。天国に来たら神様を決める大会があるではないか。神様になればわかるかもしれない…。

第1話　天に召された男（前書き）

拙い文章ですが感想等戴けたらもっと頑張れる気がしますm（＿）mよろしくお願いします。

第1話　天に召された男

　濃い霧が立ちこめる中、一人の青年が天に召された。死因はわからなかった。それは一瞬の出来事だったからである。
「あぁ……。俺は死んだんだ。」

そう思い目を開けるとそこは不思議な世界が広がっていた。
虹色に輝く地面。甘い匂いのする木々。金色に光る空……。
「ここは……何処なんだ？俺は死んだんじゃないのか？そうか、ここは天国か。」

そんな一人言をいいながらふかふかの地面に横になる。
「天国ってマジであったんだなぁ。いやぁ、死んで良かったなこりゃ。」

この男、かなりのポジティブシンキングである。名前は犬養（いぬかい）　一（はじめ）という。特技は寝ること。のび太君並みに寝つきがいい。中肉中背、プレッシャーに弱い正真正銘の”そこらへんにいる男”である。

数時間後、
「……寝てた。」
ふこふこの地面が気持ち良かったらしく寝てしまっていたらしい。
空は金色から少し明るさが落ちたような気がした。

『……は…お急ぎ……さい』

何かアナウンスのようなものが聞こえるが上手く聞き取れない。犬養は声のする方に行ってみることにした。微妙に頭痛がする。ふかふかの地面は歩き辛い。声のする方に行ってみる頃には全身汗だくである。

やっとテントのようなものが見えてきた。運動会のような縁日のような雰囲気であるが見たことの無いものが数多くある。

「らっしゃ～い！天使の羽ペンはいらんかね～！これでラブレターでも書けば効果は絶大だよ～」

「まいどっ！悪魔の耳はいらんかっ！付ければ悪口は聞き逃さないよっ！さぁさぁっ！」

いろいろな商品があるもんだと思いながら天国でも現世でも変わらないもんだな、と犬養は少しニヤリとしてしまった。　天国でも上手く暮らして行けそうな気がしたからである。

『参加希望者はこちらの受付まで急いでください』

遠くで聞いた声だ。だが直接頭の中で響いているのに気づいた。通りで頭痛がするわけだ。この頭痛にも慣れなきゃいけないのだろうか？

「しかし、何に参加しろってんだ？祭りか？神輿でも担ぐか？」

犬養は意外と古風な考え方をする所がある。生きているときは意外と頭固いよねとよくため息混じりに言われていた。

犬養は近くにいた自分より若いと思われる青年に聞いてみることにした。

「なぁ、こりゃなんの祭りなんだい？」

青年は
「こりゃあ、１００年に一回の神様を決める大会じゃよ。お主もでてみんかね？」
犬養は笑ってしまった。
「おいおい。なんだよそのじいさんみたいな喋り方は！流行かなんかか？」
青年はにっこりとして
「生きてた時の癖が抜けなくての。おまえさんはこっちに来たばかりじゃろ？こっちでは姿なんてあまり意味はないんじゃよ。わしは１００歳まで生きたんじゃ。お主は？」
「俺は…２４だな。短かったなぁ。」
改めて考えると少ししょんぼりしてしまう。
「じゃあわしの方が年上じゃな。といっても年なんてここじゃ大して重要じゃないがのう。」
犬養は少しクラクラしてきた。ここでは違うことが多そうだ。「おまえさんは何でこっちに来たんじゃ？」
「なんで死んだかってことか？それがよくわかんないんだよ。いつの間にかだな。」
苦笑混じりで言う。
「なんと…。原因がわからんのか…。」
青年（享年１００歳）は考えこんでしまった。
「よくあることとかじゃないのか？珍しいのか？」
少し気になってきた。

「あまり聞いたことがないのぅ。みんなだいたい死ぬ瞬間は感覚が鋭くなるからのぅ。」

「そういうもんなのか？」

「そのせいで変な能力に目覚める者たちもいるほどじゃ。ソーマとか言われてるんじゃが…。」

「へぇ…。」

超能力みたいなもんなんだろうな。犬養は勝手に推測する。

『最終締め切りです！参加希望者はすぐに受付を済ませてください！』

また頭痛がする。アナウンスの声だ。

「神様になるといいことあるんかい？」

犬養は尋ねる。

「次の１００年間、下界をある程度自由にできるんじゃ。この前神様になったやつなんてミリタリーマニアだったらしくてのぅ。戦争が異常に多かったじゃろ？困ったもんじゃわい。」

「神様になったらなんで死んだかもわかるかい？」

目を煌めかせて尋ねる。

「おそらくじゃが…。」

「よし！大会に出てみる！じいちゃんありがとよ！」

ニカッと笑って頭を下げる。

「頑張ってよい神様を目指せよ。」
青年もにっこりとして答えた。

【第９１回天椅子杯～ｉｎ天国～総合受付】

犬養は少しわくわくしている。

第2話　ソーマについて

「受付はここかい？」
犬養は総合受付と書いてあるテントに聞いた。丸眼鏡をかけた髪の毛もピシッとしている人がワタワタとせわしく動いているのが見える。犬養に気づくと、

「参加希望者の方ですか？ではこの用紙に氏名と住所、霊話番号をご記入ください。」

「…名前は犬養一（イヌカイハジメ）で…じゅ、住所？俺まだこっちの家ないんだけど…あと霊話番号ってなんだい？」

「最近こちらにいらっしゃったんですね？では、住所不定…と。霊話番号とはまぁ向こうの電話番号みたいなもんですね。霊話番号はなし…と。あと出身は？」

「しゅ、出身？日本なんだけど…。」

「あぁあっちの出身なんてもう関係ないですよ。天国出身か地獄出身かです。」

「ここに落ちてきたから天国出身になるのか？っていうか地獄出身でも神様になれるの？」

「もちろんです。前回の神様は地獄出身でしたよ。世の中正義も悪も必要なものですから。あとは死因は？」

「それがわからないんだ。覚えてない。」

「ふぅむ。それは珍しいですねぇ。なかなかお目にかかりませんよ？あとはソーマをお持ちですか？」

「ソーマって超能力みたいなやつ？いやわかんないよ。たぶん無いんじゃないか？」

「ではこちらでお調べ致しましょう。」
そう言うとこの役所人は苗木を持ってきた。

「この苗木は世界樹と呼ばれる苗木です。不思議な力に反応して様々な行動をしてくれます。私の場合は…」

そう言いながら苗木に手をかざすと、葉に文字が無数に出てきた。
【眼鏡役所人髪七三…】

「私の場合相手が思ってることがこの葉に浮かび上がるようです。七三分け止めた方がいいですか？」

「い、いや、似合ってると思います！はい！」

犬養は少しビビってしまった。そんなこともできるのか…。

「世界樹で作ったペンを相手に持たせれば相手は嘘を書けません。このソーマのおかげで私は役所に受かったんです。」

役所人は誇らしげである。

「あ、私の話はこんなもんでいいですね。あなたもやってみてください。世界樹に手をかざして集中するんです。」

犬養はごくりと息を飲む。少しワクワクしてきた。
「えっと…手をかざして…集中…っと」
世界樹の苗木がうねうねしている。葉にも枝にも何も変化はない。
「どうやら何もないみたいで…」
役所人が言いかけたその時、世界樹の苗木が
「ワン！！」
…吠えた。犬養はびっくりして目を開ける。でも一番びっくりしているのは役所人のようだ。
「え、えぇ～！」
トレードマークの眼鏡が顔から落ちそうになっている。
「これが俺の能力なのか？？」
犬養もよく理解できない。
「お、おそらくそうなんでしょう。でもどんな能力なんでしょう。い、犬？」
いったいどんな能力なのかも何に役立つかもよくわからない能力である。
犬養は自分の手を見て呟く。

「い、犬かぁ…。こっちの世界でも犬とは切れないのか…。」

犬養は犬にはあまりいい思い出がない。

まず自分の名前。イヌカイハジメ。犬飼い始め…そういうふうに小さい頃はイジメられた。

一（はじめ）という字も良くない。１は英語でｏｎｅ（ワン）だからだ。そのせいでよく犬に纏わるあだ名をつけられてきた。

犬養は溜め息をつきながらまぁしょうがないという顔をする。これも何かの縁なんだろう。

「あなたは珍しいタイプの人間みたいですね。どうぞ頑張って神様になってください。」

ズレた眼鏡を直しながら言う。

「ありがとう。ところでこの大会は何するんだい？」

「あ、まだ説明してませんでしたね。大会の内容は毎回変わりますが、まぁ障害物競争サバイバル版という所ですかね。」

「さ、サバイバル…。何もわからん…」

早くも暗雲が立ちこめる。

「大丈夫ですよ。もう死ぬことないですから」

役所人はにこやかにいうがそれは大丈夫なのか？

「他に質問はございませんか？」

「いや、特にないよ。」

「では、あちらの扉の奥にお進みください。」

「あぁ、はい。いろいろありがとう。」

深く頭を下げる。

ついに、大会スタートだ。犬養はゆっくりと扉を開けた。

第3話　咲。

扉を開け、暗い通路を進むと、そこはジャングルだった。犬養の前に登録したであろう人達が暇そうにたむろっていた。

「この中から神様が決まるのかぁ…。」

犬養はワクワクしていた。辺りをキョロキョロ見回してみると少し遠くに人だかりができている。

とりあえずそこに行ってみることにした。

女の子とガタイのいい男が言い争っている。

女の子はどちらかと言えば真面目な学級委員タイプ。顔立ちは日本よりも中国のそれに近いか。

犬養は近くのやつに何があったのか聞いてみた。

「あぁ、女の子の方が男に言いがかりをつけたんだよ。なんかぶつかってなんか壊れたとか…」

そういえば女の子のものと見られるリュックサックがひっくり返っている。

「どーしてくれんのよ！これ高かったのに！台無しじゃない！」

「うるせーなぁ？そんなとこに置いてんのが悪いんだろ！このブス！」

頭の悪さが滲み出ているような喋り方でブスと言われ相当頭にきたようだ。

「もう許さない！」

女の子はリュックの中に手を突っ込み何かを取り出し、男に向かって投げつけた。

男の体に試験管のようなものが当たった瞬間、男の叫び声と共に炎が巻き上がった。

「うわぁぁ！」

男は地面で炎を消そうと転げ回っている。

犬養はその瞬間無意識のうちに女の子の手を引っ張り連れ去った。

人だかりはさらに大きくなり、男があの女を探し出せと喚き散らしている。

ある程度走り犬養は女の子に

「なんてことするんだ！バカ！」

と、大声を出した所でなんで俺はコイツを助けたんだろうと我に返

った。少し懐かしい気がした。
「助けてなんか頼んでないわよ。」
ケロッとしている女の子が言う。
「でもまぁお礼はするわ。私は咲(サキ)。あなたは？」
「犬養だ。」
あえて下の名前は言わない。散々バカにされてきたからだ。
「ところでアレどうやったんだ？」
「アレ？あぁあの不男にやったやつ？」
けっこう根に持つタイプらしい。眉間にシワを寄せながら咲は答える。
「簡単よ。アレはナトリウムと水を分けておいて試験管が割れると合わさる仕組みよ。」
犬養は首を傾げる。ナトリウムってよく聞く金属のあれか？
「ナトリウムは水と反応すると燃えるのよ。」
溜め息混じりに補足する。なんかバカにされたような気がした犬養はやっぱりという顔を作る。
「アルカリ金属は反応性が高くて水と常温で激しく反応して…」
ペラペラと喋る咲をアナウンスが遮る。
『これより天椅子杯を開始します。』

犬養はあの七三の役人に静かに感謝した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0977f/

天椅子

2010年10月22日00時19分発行